

## ミレニアム・プロミス・ジャパン 第26回研究会

### 台風30号で被災したフィリピン国レイテ島タバngo町の 小学校復興事業

- 【講師】** 赤坂友紀氏  
(ミレニアム・プロミス・ジャパン フィリピン被災地支援現地派遣員)
- 【日時・場所】** 2014年7月8日(火) 午後6時30分～午後8時00分  
日本財団ビル2階 第8会議室
- 【概要】**
1. はじめに
  2. 現地調査 タバngo町、小学校仮設教室
  3. ジャパン・プラットフォーム助成申請
  4. 事業の実施
  5. さいごに・・・ フィリピンで学んだこと
  6. 質疑応答

#### 1. はじめに

##### ■ 台風30号(スーパー台風 ハイエン)について

ハイエンは、去年(2013年)の11月8日にフィリピンに上陸した台風である。日本ではあまり報道が無かったが、最大瞬間風速が90m/sや105m/sという、信じられないような数字を叩き出した。最初の報道では史上初の台風と表現され、途中から史上最大級という表現に変わった。特筆されるのが、高潮(ハイサージ)と言われる現象である。フィリピンの人たちも今まで聞いたことがないような現象だったので、どう対応していいか分からなくて逃げ遅れてしまったと言われる。少しショッキングなのだが、現地の友人から、タクロバンのハイサージの映像をもらっているのご覧いただきたい。台風というより津波のような現象で、私はこれを見た時に、3.11を思い出してしまうような映像だと思った。

フィリピンの中部を抜粋した地図を見ていただくと、観光で有名なセブ島の隣の、レイテ島という所の被害が一番大きかったと言われている。死者は6200人である。私は神戸の出身なのだが、

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

阪神淡路の時の死亡者数と大体同じような被害である。

あまり知られていないのだが、去年の10月にレイテ島の隣のボホル島で、マグニチュード7の地震があった。この辺りは災害続きで、かなり大変な状況になっている。

## ■ 2013年12月の様子

私は、台風が直撃して1か月半から2か月近く経った昨年12月末に、現地を訪れる機会をいただいた。貨物船が打ち上がっている様子などを見ても、陸前高田や東北の風景と非常に似ている感じがして、何とも言えない気持ちになった。

12月末に行った時の映像も見ていただこうと思う。レイテ島の東海岸にあるタクロバン市周辺は、高潮の被害を受けた。1か月半経っているので、これでもだいぶ瓦礫の整理がされて、道路を車が通れる状態であったが、現地の人がおっしゃるには、道路脇にずっとご遺体が並んでいる状況だったそうだ。映像の中の青い服を着て作業をされている方は、未だに瓦礫の中のご遺体を探したりしている状況だった。国が違って、台風と地震という事象も違うのだが、他人事とは思えない印象を受けた。

## ■ 被災したレイテ島を訪れるようになったきっかけ

私は、元々は普通の会社員で、国際協力の専門家でも、災害援助の専門家でもない。どのようにして、フィリピンに渡航して、最終的にミレニアム・プロミス・ジャパンとご縁を得たかということについてお話をさせていただく。

きっかけは、単純に、何か私にできることがないだろうかという気持ちで、現地に行く道を探したことである。というのも、台風の報道が11月8日に少し新聞に出たものの、当時、日本では特定秘密保護法が話題になっている頃だったので、3日目位から台風の話をお聞きしなくなった。CNNや国際ニュース等では、ハイエンの話はよくあったのだが、どのようになっているのだろうと思った。3.11では私も現地で活動をしてきたが、その時は世界の色々な方が助けてくださった。今回の台風は、もしかすると3.11以降最大の災害なのではないかと感じ、その時に、日本は何か次にお返しをしないのだろうかと考えた。もちろん国としてやっていることはあるのだが、やはりひとりの民間の人間として、何かできないかと思って探したのである。ただ、3.11の時のように、普通の人間のボランティアを募集するような団体というのはなかなか見つからなかった。一方で、しばらくするとニュースでハイエンの話をするようになったのだが、現地で暴動や略奪が起こっているということだった。3.11の時は、日本人は支援物資をもらう為に並んで非常に秩序があったのに、フィリピンは銃社会で、殺人や商店に強奪に入るといったことが起こっており、そういうことを比較する形で話題として上がるのが非常に不自然な感じがした。

そして、温暖化については、フィリピンは被害者になっている。ちょうどその時COP19があったのだが、フィリピンの代表団が、先進国が温暖化を止めてくれないと私たちはもう立ち行かないのだと言って、ハンガーストライキをしていた。しかし、身の回りの情報を見ていると、日本にいつそういう台風が来るのかという話題が多くて、これも非常に不自然に感じた。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

そのようなことを思いながらも、何もできることがなくて悶々としていたのだが、現地に行きたいということはずっとお話ししていると、ご縁があった。元は吉本芸人の方で、今は色々な支援活動をしている方がいらっしゃるのだが、その方が年末に現地に行くということだった。その方に連れて行ってほしいという話をしたところ、夫と一緒にそのチームに入れていただいて現地に入ることができた。それが最初のきっかけである。

ちなみに、暴動の話については、タクロバンの方に聞いたところ、7日間水も食糧も来なかったということだった。私は石巻で、陸の孤島になっていた所で活動していたのだが、そこでも3日目にはおにぎりとお水を飲むことができた。そういう状況の違いがある中、1週間何が食べられるかわからないような状況で、並んで配給を待てるかということだ。そうした背景が報道されないまま比較されるというのは非常に不自然だと思う。

## ■ とにかく現場にしてみると・・・(フィリピンでの復興支援活動経緯)

そのようにして、私はそれほど専門性がないのだが、とりあえず現場に行ってみようというタイプで、現場に行ってみるとお役目をいただくという流れで来た。12月末に現場に行ってみたところ、現地で受け入れをしてくださったNGOの方が、今人手が足りないということだった。私は今、配偶者の転勤で休職中なので、その時間を活かして現地でボランティアをした。渡航する前に夫と一緒に寄付金を集めていたので、そのお金で支援物資や学童品の提供等をさせていただいた。1月末で資金が一旦途絶えて、一度日本に帰ってきた。このままで終わってしまってもよいのかという気持ちがあった時に、ちょうどミレニアム・プロミス・ジャパンの視察のお話で人を募集しているということで、現地の調査からファンドレイジング、実際の事業のところまで携わる機会をいただいた。

## 2. 現地調査 タバngo町、小学校仮設教室

### ■ 事業地 レイテ島タバngo町 概要

高潮があったのは、レイテ島の東側のタクロバンやパロ等の、人口の8割が亡くなったと言われる地域で、国際的な援助機関はこちらを優先して入っていった。他方、被害はあるけれども支援の手が入っていない場所もある。日本リザルツというNGOが既に現地に入られていて、ミレニアム・プロミス・ジャパンは、そこからの情報をいただいて入ったというのが経緯である。

タクロバンはレイテの州都で、人口は約20万人である。それに比べて、今回事業地となったタバngoという町は人口3万5千人程で、非常に小さな半農半漁の町である。実際に行くと、本当に支援が必要なのか、そして、私達でできるのかということを確認してきた。

### ■ タバngo町 町役場へ訪問

ミレニアム・プロミス・ジャパンの理事長の鈴木さんと一緒に現地に入り、10日弱の調査を行った。鈴木さんが非常に運の強い方で、現地に行くと、アポを取ってなくても本当に必要なキーパ

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

一ソんにどんどん会っていくことができた。行った時にちょうど町議会がやっていて、町長さんとお話できたり、村長さん達とお話できたりして、順調に調査が進んだ。上手く行く時や、ご縁が集まってくる時というのは、これから進んでいくことが本当に求められていることなのではないかと個人的に考える。タバngoにはずっといたのだが、後になってこんなにすべてのキーパーソンが集まるような機会はなかった。

## ■ タバngo町 学校、教育関連者の訪問

ミレニアム・プロミス・ジャパンとしては教育支援に力を入れているということで、タバngo町の中でも、学校で何か支援ができないかという調査をした。タバngo町は南と北に分かれて教育責任者の方がいらっしゃる。普段は出張でなかなかいないのだが、二人共会うことができた。校長会に出たり、PTAの人も訪問したりした。

それと同時に、広域をまとめているタクロバンにある教育省の責任者の方や、国連関係で、横串で教育関連のことをまとめている部門を訪問して、全体の流れがどうなっているかということも調査した。

## ■ タクロバン/タバngo 小学校被害比較

データと、実際に現場を見た感じで調査した結果、タバngo町の小学校で全壊・半壊といった損傷を受けている割合は、タクロバン市と実はあまり変わらないということが分かってきた。

## ■ Education Cluster 支援状況

一方で、タバngo町の付近は、支援がまだ全く入っていないようなエリアである。当時は2月なので、台風から4か月位経っている。従って、ここは支援が必要な場所なのではないかということが分かってきた。

更に、タバngo町は幹線道路からも離れているので、今後も教育に関する支援が入ってこないような所なのではないかということだった。

## ■ 一般的な就学環境復旧のSTEP

就学環境の復旧のステップについて、州都タクロバンとタバngoの比較をしてみた。一般的にフィリピンで行われていた就学環境の復旧のステップというのは、まずはテントで授業を再開しようというものだ。二つ目は、あまり日本では考えられないと思うが、被災した学校を、壁は残っているので屋根だけ直して使っていくというものだ。三つ目は仮設の教室で、最後は本設の教室といったステップである。

## ■ テント教室

テント教室については、タクロバンでは、ユニセフの提供している大きなテントを使っていた。これでもやはりテントで授業をするというのは大変なことだ。私は2月まではずっとタクロバンや

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

タナワンで活動していて、こういうテントは見慣れていた。しかし、タバngoに行ったらすごく驚いたのが、アーミーが使っているようなテントを学校の仮設テントとして使っていたことだ。

他にも、タクロバンでは、仏教団体が提供している、段ボールで作られた仮設のテントがよく見られた。これはかなり立派なもので、非常に簡易にできる為、色々な所で建てられていた。しかしタバngoでは、民家のシェルターとして使われているようなテントが、学校のテントとして使われているような状況だった。

## ■ 仮設教室、本設教室

仮設教室や本設教室といったものも、タクロバンの方では2月になったところで、ちらほらと出るような状況になっていた。フィリピンの大手のテレビ会社のABS-CBNが支援して、レイテで被災後初に作られた学校等もあった。

一方タバngoでは、そういう話はまだなかった。これも本当に驚いてしまったのだが、PTAの親御さんが瓦礫や屋根を集めてきて作ったような仮設の教室を使っていて、雨が降ったり風が吹いたりしたらすぐに逃げるように指導がされているような状況だった。

## ■ タバngo町への教育支援を決定した理由

以上のことを受けて、ミレニアム・プロミス・ジャパンとしては、タバngo町に教育支援をすることを決めた。

一つ目の理由としては、データにあったように、中心街と比べても影響を受けていることだ。

二つ目の理由として、今後も支援計画がなかなか見込めないことである。

ちなみに、既にドイツ人の男性の方が個人的に屋根を修復する活動をされていたが、それ以外に今後も支援が入ることが見込み難かった。

従って、私達が新たに入っていくとことが重要なのではないかと結論づけた。

## ■ 仮設教室の建設が重要であると結論づけた理由

続いて、タバngoで仮設教室を作ろうと結論づけた理由は次の通りである。

まず、テント教室は4か月経ったフェーズの支援ではない。

屋根を中心とした修復に関しては、ドイツの方が既に行っている。また、決して安全な環境になるというわけではない。

本設教室ができるのが一番良いのだが、やはり一基200万かかってしまうというのと、横串でやっているクラスタの方針としては、あくまで本設教室は政府の方でやっていくべきではないかということであった。従って、現地の方のニーズも酌みながら、仮設教室を作っていくという方針にした。

## 3. ジャパン・プラットフォーム助成申請

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

調査の時点ではまだ助成金は取れておらず、これから助成金を取るというステップがあった。ただ、既に色々な方に調査してお話をうかがっており、まだ支援ができるか分からないと言いながらも、心情的には、どうしても助成を取らなければという気持ちになる位、現地の方が積極的に情報を提供してくれた。

## ■ ジャパン・プラットフォームの支援のしくみ

ジャパン・プラットフォームという NPO 団体があり、財界や政府から常に支援金がストックされている。実際に、自然災害や紛争があった時に、登録している NGO 団体がそこから助成金を受け取ってすぐに出動する。場合によっては即日出動するような場合もあるそうだ。ミレニアム・プロミス・ジャパンとしては、これまでずっと活動してきたアフリカの活動に更に幅を持たせるということで会員になってから、今回が初出動になる。今回は審査も慎重になるので、一か月位かけて審査が行われて、晴れて助成金をいただいて現場で活動ができることになった。

## 4. 事業の実施

### ■ 建設準備

既に、リザルツという NGO 団体のお二人がタバゴ町に入られていた。リザルツの西山さんはずっと第一線で活躍されて、東ヨーロッパの方で国から賞を授与されている。本当に立派なことをされている方々だ。そのリザルツとミレニアム・プロミス・ジャパンが、非常に友好的な関係にあり、実際に新たにフィリピンに入っていくのであればタバゴに是非ということでお声掛けをいただいた。私達が現地で活動するにあたって、フィリピンは初めての事業地であるし、災害地であるので、分からないことがいっぱいあったのだが、リザルツさんのおかげでこのプロジェクトが成功したと言っても過言ではないと思う。

また、最初の事業の実施にあたって、MPJ の技術顧問で、元々国連でお勤めになっていた江藤さんという方に 1 週間来ていただいて、事業準備をご指導いただいた。

江藤さんは 72 歳で、リザルツさんからは 80 歳位の野呂先生という方がいらしていた。ご年配の方が、フェリーに乗って、時差があって、大変な悪路のところを、人道支援で活躍されているというのは、非常に立派なことだと感動した。私もまだまだ頑張らないといけないと感じた。

### ■ 体制の構築、コミッティの設立

MPJ で今回非常に大事にしたのが、学校を建てるにしても、実際に建てた後にきちんと使ってもらくために、できる限り現地の方をインボルブしていくことだ。MPJ としては 3 人の体制だったのだが、町役場の方にもご協力いただいた。その中に建設課の方がいらっしゃる。そして、学校関係者にもご協力いただき、3 者で物事を決めていけるように進めていった。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

というのも、町役場だけをお願いしてしまうと癒着があったりして、学校関係だけでも然りなので、できるだけそういうことをなくして公平に進めていくために、3者間でやっていくという考え方である。

## ■ 教育省推進の仮設学校図面を採用

どのような仮設校を作るかというのは、オリジナルで作ることも可能ではあるが、教育省として推進しているものを使うことにした。そうすれば、スタンダードなもので幾ら位になるという見積りも出ていたので、騙されることを防げるのではないかと考えた。

## ■ 建設地の選定

重要な建設地の選定だが、学校関係者の方に主立っていただいて、支援が必要なところを優先順位で選んでいただいたところ、見事にばらばらの場所を選んでくれた。リードタイムが5週間位で、助成金での活動期限のタイミングもあったので、短い中でこれらのばらばらの場所をやっていけるのかという懸念もあったのだが、まずは本当に必要としているところを優先的に進めていこうという風を選んだ。

たとえば候補地の一例として、舗装されていない細い道を3km位辿って行くような所があった。そうするとセメントや砂利、大きな支柱等を運ぶのが非常に困難である。しかし、現地の町役場の方や学校関係者の方が、自分達で運んでもいいからそこに作ってほしいということだったので、候補地として選んでいった。

ちなみに、学校が全壊してしまっ場所がないという所では、民家の一角を借りて、3学年が一緒に授業をしていた。

## ■ 建設の推進体制構築

大まかにいうと、建設するには、資材を集めることと、工事をしていくことという二つのステップがある。一般的には、コントラクターを雇って物事を進めるということが、スムーズである。契約をその人として、いつまでにこの値段でこのスペックのものをきちんと収めてくださいというやり方が一番安全なので、そのような形で進めようかという話もあったのだが、結果的にはコントラクターを雇わずに、コミッティ、つまり町役場と学校の先生達とMPJでそれぞれ役割分担をして遂行することにした。

その理由は、次の通りである。一つは、コントラクターを雇うことによって30%位のフィーを払わないといけないので、そのフィーがあるのだったら、現地に使ってほしいという気持ちである。二つ目は、確実な建築にするためである。平たく言うと、手抜き工事をしてしまうことが多く、今回の台風被害でも非常にそれが如実であった。悪徳コントラクターのようなところは名が知れているようなのだが、そういうところがやっているエリアは、同じ学校のスペックでも、柱の中がすかすかになっていたりして、被害が大きい。従って、自分たちで中が見えるようにしたいということで、たとえば資材を調達するにしても、コントラクターに任せるのではなくて、自分たちで買って

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

いくようにする。そのような形で提案を受けた。

実際に、それぞれどういう役割でやっていったかということ、6 か所学校を作ることに決めたのだが、MPJ が材料を買って、各校長が現場監督をしていく。とはいえ、それぞれ素人なので、技術指導を町役場がやってくれる。このように、三者でそれぞれの役割を持つ進め方にした。

それぞれがボランティアなので、期日を守ってもらえるかということ等が問題となってくるので、契約書を交わして進めていった。

なお、13 日で建設を終えるというスケジュールリングをしたのだが、万が一 13 日を超えてしまった場合は、校長先生が学校の貯金を持ち出すという内容の契約書を提案した。これは OK をいたたくのが難しいと思ったのだが、先生方はそれでもやると言ってくださった。その代わりと言ってはなんだが、たとえば 10 日間で終わったら、先生の裁量で、余ったお金を学校の机に使ったりできるような形にした。

## ■ 資金の流れ

資金に関しては、各部門が個人的に使わないよう縛りを持てるような仕組みを作って進めた。

## ■ 資材の調達

以上のような形で学校を建設していく仕組みを作り、一つ目の、資材の調達というステップに入った。これは、MPJ が主体となって現地の材料業者に入札をして、それを評価したものをコミッティの全部門で内容を確認して合議制の上で決めていくという形で進めていった。

## ■ 困難を極める資材調達

ここまでは全て順調にしていると思ったのだが、一番安い値段で、納期も希望通りというところを選んだ途端に、翌日に、実はできないという風に言われてしまった。納期はあつてないものかと思えという話は、現地をよく知る人には聞いていたのだが、早々に洗礼を浴びた。

滞在期間が長くなるとコストもかかるし、助成金をいただいているので、いつまでに終わらせるという縛りもあるので、悠長なことは言っていられないのだが、コミッティで協力して進めていくというのがここで役に立った。資材調達では、各学校に何個ずつという資材のリストがあるのだが、業者は足りなくても平気で納品してきたりする。それを一つ一つチェックしていくわけだが、ない袖は振れないと平気で言われてしまう。そういった時に、たとえば町役場の建設課の方が地元では力を持っているので、実際に罰則を与えることはできないのだが、きちんと納品しないと牢屋に入れるぞという位のことを言ってくれたりして、そんな形で協力関係を持ちながら進めてもらった。もしそれをやってもらわなければ、前に進められなかったのではないかと思う。

もちろん、復興特需で材料がなくて前に進めないというのもあれば、建設の候補地がかなり山奥で、雨が降ってしまうと道がどろどろになってトラックが入れないという状況もあった。天気予報とにらめっこしながら、資材の配達を調整していった。

通常はコンクリート等の重たいものはダンプトラックが来るのだが、狭い所になると、町



# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

役場が無償でトラックを出してくれたり、最後には牛まで出てきたりして、牛でもだめなところは人が担いでいくということになった。驚いたのが、現地の労務費が非常に安いことである。車が入れない所で、追加で牛や人を使って配達した費用が、5000ペソ、つまり1万~2万円程度であった。学校一つが、建設の材料と労務費全体で50万円位なので、いかに物を運んだりする人件費が安いのかというのが分かると思う。

## ■ コミッティ 毎週の進捗会議

5週間でこのプロジェクトを進めたのだが、毎週水曜日に、町役場の方と学校の校長先生と私達で、町役場に集まって話をした。途中からは、いかに資材業者を動かすかということが話題の中心になっていった。毎週こうやって集会をすることによってチームワークが結束されていった。

## ■ 建設課より 棟梁へのブリーフィング

最初は、1週間で全ての資材を現場に持って行って、それから建築を始めようということだった。しかし、資材の到着が遅れるので、パーシャルデリバリーにしてもらった。たとえば、基礎の分だけ来たら、次の資材を待たずに作業を始める。3日後には支柱が届くようになって、その後、屋根が届く。このように、資材が全部届く前に建設を始めた。

それぞれの学校で、棟梁や大工さんを雇うのだが、6校がそれぞればらばらの作り方をしないように、町役場の方が棟梁にブリーフィングを行ってくれた。実際に建設が始まると結構スムーズに進み、PTAの会長や校長先生が毎日現場監督に行った。

ちなみに、フィリピンでは毎日、学校の先生等が現場監督に行かないと、気が付くとさぼってしまうということだった。そうやって長い間働いて、時間がかかった分だけフィーをアドオンすることがよくあるそうだ。そうしたことを防ぐために、毎日監督するというのを、校長先生とMPJの方で行った。

## ■ 建設実施

資材の調達に比べると建設はかなりスムーズだった。しかし、たとえば、資材が来ないので別の資材で作ろうとして、後で部材が足りなくなるということもあったりするので、建設課の方と一緒にそういう問題が起きないように確認しながら進めて行った。

## ■ 完了検査

最終的に、棟梁だけでなく、建設課の方が一緒に完了検査をして、完了通知書をMPJで発行するという流れにした。建設課の方は、本当にお忙しいのに、週に3回位は現場を一緒に回ってくださった。ボランティアなので、最初は、幾ら役所の方でも本当にちゃんとしてくれるのかということが懸念されたのだが、資材業者のおかげで、皆で一丸となってやっていけたのではないかなと思う。

## ■ 仮設教室の完成 ⇒ Semi Permanent Classrooms

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

実際に完成した学校は、仮設教室とはいえ、現地の方が言うには耐用年数が15年程あるということだ。皆さんが、セミパーマネント・クラスルームを作ってくれてありがとうという言い方をしてくださった。支柱等は15年位持つらしいが、しばらくして脆くなってきたら、コンクリートで壁を補強したりしてずっと使っていきたいという話をしてくださった。

私達としては、本設教室の一つ作るのではなくて、仮設教室を5つ6つ作って、現地の方が後々持っているお金でプラスしていく方が良いのではないかという考えで進めたのだが、結果的に皆さんが手を動かしてくださったことによって、愛着を持って今後も修復していただけるのではないかと思う。

## ■ PTAによる増改築

既に早速、増改築されている学校が一つある。元々の設計ではトイレがなかったので、PTAが持っているMOEEという貯金のようなものがあるのだが、それを使ってお手洗いを設置したりして、皆さんが積極的にこのプロジェクトに参画してくださった。

## ■ 除幕式

スケジュール通りに行くかどうか心配されたが、最終的にはスケジュール通りに除幕式を迎えることができた。除幕式では町長のスピーチがあった。フィリピンは大統領が女性だったこともあり、女性の社会進出が非常に進んでいるところで、この町長も女性である。

レイテ島というのは、大戦中の天王山と言われる場所で、日本兵が非常に激しく戦った所である。現地では、日本に対してあまり良い感情を持っていない方ももちろんいっぱいいらっしゃる。しかし、除幕式の中で町長から、昔は戦いあった関係だが、こういった形で今私たちは友好関係を持つことができたということをおっしゃっていただいた時には、本当にこのプロジェクトをさせていただいて良かったという気持ちになった。

フィリピンの方は、ホスピタリティに溢れていて、明るくて、困っていることがあったらどんどん助けてくれるような方々だった。

## ■ 各校長にアンケートを実施

最後に、各校長にアンケートをとったところ、びっしりと書いてくださった。しばらくしたら補強して行ってパーマネントに作っていくようにしたいとか、一番僻地の校長先生は、まさかやってくれると思わなかったという風に書いてくださった。支援活動というよりどちらかというと開発のような領域の場所だったのだが、そういったところを感謝していただいた。

とはいえ、今回の一番の反省点は材料業者だということで、公平に価格を見るのは良いのだけれどもやはりきちんとデリバリーするところを選べるように今度は自分たちもサポートしたいという意見もあった。

結構ブラックジョークが好きな人たちで、次の台風が来たら一緒にやろうとか、そういった意見もあった。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

他には、友達になれたことが嬉しいとおっしゃってくださる方もいた。

ここで、僻地の学校の様子を動画で見えていただく。私達も現場に行くのに 3km 位、車ではなくてバイクに乗って行かないといけないような所だ。東海岸に比べて西海岸は、高潮の被害がない分、見た感じ長閑ではあるが、昔はココナツの木が生い茂っていたところが途中で折れてしまったりした。ほんの 70 年前に、日本兵が逃げてき場所だったのかと思うと、あまり想像ができない感じがした。

校長先生は非常に忙しくて、ちょうど私達が建設をした 4 月・5 月というのはお休みで、6 月から新学期が始まるということだった。新学期が始まるまでになんとかこの建設を終了させようとしていたのだが、先生方がお忙しい中をぬってやってくださって、最後、除幕式のときも、民族ダンスを踊ってくれたりした。フィリピンでは、昔の日本のような感じで、学校の先生は非常に尊敬される立場の方々である。

## 5. さいごに・・・ フィリピンで学んだこと

以上のように、MPJ として仮設校を建設することができた。最後に、私の個人的な感想でもあるのだが、フィリピンで現地の方と活動させていただくことによって自分自身が学んだり感じたりしたことを大きく三つにまとめた。

### ■ フィリピン人のメンタリティに学ぶ

#### ・ 学校教師の言葉

一つ目に、フィリピンの人たちの精神性に学んだことがある。写真を見ると、子ども達はとても良い笑顔をしている。しかし驚くことに、彼らは、人口の 8 割が亡くなったと言われる場所の子ども達である。現地に行く時に、カメラを向けるのは非常に気が引けるのだが、やはり伝えないといけないので、カメラを向けさせてもらう。私がフィリピンで最初に驚いたのが、カメラを向けたら皆が喜んでポーズをとることである。現地の人に色々話を聞くと、決して僕たちは馬鹿なのではないと言う。僕たちの歴史は、スペインの植民地から始まって、アメリカの侵略、日本の侵略と、決して良い歴史ばかりではない。更には、台風以前に貧困の問題があったりする。しかし結局、起きたことや困難なことは、変えようがない。そんな中で暗い顔をしたって、結局目の前にいる大事な家族が暗くなって、それが周りに伝わって自分にも返ってくる。悲しみが伝播していただけだから、強がってでもいいから、前を向いていくというのが、フィリピン人のプライドなのだということを教えていただいた。私はその言葉にはっとさせられて、今の日本人が学ぶべきところが、フィリピンの精神性にあるのではないかと感じた。

#### ・ 被災地で輝く青年たち

もう一つは、自分たちで団体を立ち上げて支援活動をしている、とても素敵な青年に会ったこと

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

である。彼は 21 歳で、元々はマニラのゴミの山で児童労働をしていた。その中で NPO の人に救ってもらって、今は大学まで行けるようになった。彼がゴミの山から救ってもらった時、自分が生きていよいか分からなかったという。でも、その NPO で、自分もゴミの山で同じように働いている子ども達を助けるような活動に参加させてもらった。彼は今、マニラで順調に大学まで行っているのだが、台風被害を聞いて、自分たちで飛行機に乗って移動し、支援物資を配る活動をしていた。彼らは、その活動で、被災孤児を仲間に入れていっている。たとえばある女の子は、台風できょうだいが 8 人亡くなってしまい、最初は口もきけなかったそうだ。それを、仲間に入らないかと誘って、一緒に支援活動をすることによって、自分も必要とされているのだ、自分でも何かできるのだという気持ちの変化があったそうだ。そういった形でどんどん仲間に入れていっている彼らに会って、すごいと思った。そういったことができるというのは、本当に強さを持っている青年たちだと思う。最初に現地に連れて行ってもらったお笑い芸人の方がそれにすごく共感して、今、応援してくださっている。そういう青年たちに出会ったことも、現地に行って学んだことの一つだ。

## ■ 70 年前のレイテ島に想いを馳せる・・・

三つ目は、この長閑な所で、ほんの 70 年前に私たちの祖先が戦わざるを得なかったということだ。私は戦争のことを知らない世代だし、現地に行くまで、レイテが 8 万人もの日本兵が亡くなった場所であるということを知りなかつた。『レイテ戦記』という本があるので、ぜひ機会があれば読んでいただきたいのだが、その中で、日本兵の太腿やお尻だけがないようなご遺体がいっぱいあるということが書いてある。つまり、兵隊さん同士で、亡くなった兵隊さんを食べて生き残っていくほど、追い詰められた状態であったということだ。色々な所に日本兵の慰霊碑があり、若干 20 歳の兵隊さんの慰霊碑もあったりする。70 年といえれば一人の人生のスパンだ。その時には嫌々でも殺さないといけないような状況で、一方で私は現地に行って、学校の先生と一緒に協力させてもらえるなんて、なんて幸せな時代に生かされているのだろうということを改めて感じさせられる機会だった。

私は、勢いでフィリピンまで行って、途中でなぜ自分がフィリピンまで行ってしまったのかよく分からなくなったりもしたが、ご縁が広がって、役目があって、またこの次も少しお役目が出てきそうなので、もしかしたらこういった形で、こういうことを学ばないといけないタイミングだったのではないかと個人的には理解している。

タバゴの夕焼けは、非常に美しい夕焼けで、現地の方もとても笑顔がステキで、また帰りたいたい場所である。

## 6. 質疑応答

**Q1**: 今回は、仮設の学校を建てるということだったが、子ども達が学校に行くにあたって、家などの生活基盤そのものの復旧はどのような状況だったのか。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

**赤坂氏**：かなりエリアによって違うようだ。元々、フィリピンの就学率は低く、学校に行けない子ども達もいる。私の個人的な感覚で言うと、東海岸と西海岸では、家の再建ということがあるので、被災後に学校に戻るのは、東海岸の方が難しいのではないかと思う。一方でタバンゴの方は、大きなインフラは破壊されているが、住環境については、避難所まで設置するほどの被害ではないと感じた。

**Q2**：コミッティを作って、三者で専門分野を分け合って実施したということだが、そうすると、今回の一番の問題というのは、被害が大きくて僻地だった為、国の専門家がそこまで行けないので、外から、自立して復興するためのアイデアや、コーディネーションをしてあげる力が、必要だったということか。

**赤坂氏**：もちろん政府で、学校のインフラの復旧活動をされているのだが、圧倒的に足りていない。いつ復旧されるかという目途が立っていないところもあって、それでもなお、横串でやっているクラスターでは、学校の本設は政府の方でやってもらおうということだった。とはいえ、仮設だけでもないと、就学環境が復旧されないの、そこをNPO等の支援団体でやっていくべきではないかということだ。

**Q3**：東北の震災では、建設業者や大工さんの人手不足等の問題があった。今回の場合は、それをコーディネートする人間がいて、たとえば資材調達や大工さんの調達を、国の支援を待たずに自分たちで行えば、できるということか。

**赤坂氏**：いつもより1.7倍位、資材費が高騰していたり、腕利きの棟梁は引っ張りだこになっていたりする状況はあるが、そういう支援があれば、プロジェクトが動けるという状況だ。日本の場合、たとえば津波被害があった所は、学校や家を建ててはいけないという決まりがある。フィリピンも同様なのだが、元々住んではいけないところに人が住んだりすることがあって、絶対建ててはいけないという看板がある所に、皆平気で家を建てていたりする。日本では全く考えられないことだし、非常に嬉しいと思う。元々、不法滞在をする人たちは、早く行かないと自分達がいた場所を他の人に取られてしまう。結局また高潮が来たら流されてしまうのだが、本当に貧しい人の家だと、資材さえあれば5万円位で、3日で建ってしまうような所もあるので、それが日本とは全く違うと感じた。

**Q4**：子ども達はどのような感想を持っているのか。

**赤坂氏**：学校が夏休みの時にタバンゴで学校を建てたので、毎日建設現場には行っていたのだが、子ども達と毎日会うことができなかつたのが一番残念なところだ。今回最も僻地だった、Tahadという所では、子ども達は外国人を見たのが初めてということだった。しかし、学校を建てるということ周りを聞いてきたようで、僻地ほど、現地のお母さん達が、あの日本人が何かやってくれているという風に評価していただいていたようだ。僻地に行けば行くほど、人々は英語を話さず現地の言葉で話しているので、直接会話はできないのだが、建設課のHiloさんには、僻地の人ほどとて

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

も喜んでいるということをおっしゃっていただいた。

**Q5**: 私たちが思うよりも、おそらくフィリピンの子供たちにとっては、学校というのは、コミュニティスペースとしてもっと別の意味合いがある場所なのではないか。今回学校を建てられたということは、もしかすると私たちが思っている以上に、フィリピンの方たちにとって意味深いことだったのではないか。

**赤坂氏**: 現地の子供たちは、非常に学校に行きたがっているということを感じた。行かなければならないというような環境ではなくて、家の手伝いをしないといけないから私は毎日行けないのだという子もいたり、給食がないので自分で弁当を持参しないといけないのだが、自分だけお水を飲まないといけないという子もいたりした。それでもお医者さんになりたいとか純粋な夢を持っている子供たちがいっぱいいた。私が思っている学校よりも、もっと意味が深くて大事な場所なのではないかと感じた。

**Q6**: 東北の震災では、過疎化というのが問題であった。フィリピンでは、どのような状況だったか。

**赤坂氏**: 私自身は、3.11の時には東京に暮らしていて、ちょうどフィリピンに行ったときと同じタイミングの、災害が発生して1.5~2か月の間に、石巻の最北端の町に行った。現地に行った時に、年配のお母さん方たちとプロジェクトをすることがあったのだが、最初の30分は、最近どういうことがあったのかといったお話を聞くことに徹していた。なぜならば、周りの人に辛い環境を話すことができないので、外から来た人間で話を聞いてもらおうと楽になるみたいなことを言ってくださったからだ。プロジェクト以前に、それがコミュニケーションとして大事なことなのではないかと捉えていた。

フィリピンでは、台風の後にはすぐクリスマスがあった。フィリピン人はクリスマスが大好きな国民性で、9月頃から2月頃までツリーを出している。現地でもNPOをやっている友達がいるのだが、彼は、今年のクリスマスはさすがに不謹慎だからやらないのではないかと思ったそうだが、クリスマスをやっていたそうである。先ほどご紹介した青年たちも、クリスマスのプレゼントを配りにいていた。そういう意味でも、何か起こったことに対する捉え方が、日本とだいぶ違うのではないかと思った。

私は、後ろを振り返ってしまうことがよくあるのだが、そのことを仲良くなったタバゴのレストランの人と話していたら、終わったことでなく今のことを何故考えないのかということをつつも言われた。これは、どちらが良いとか悪いというのではなくて、かなり考え方の違いがあるのだと思う。私は向こうで2回病気になって、日本語を話せるドクターと仲良くなったのだが、彼は逆に、根本的なところを考えずに今を楽しもうとするところが、フィリピン人が貧困から抜け出せない理由だと言っていた。また、キリスト教の考え方もあって、貧しい時や困難がある時は、必ず神が助けてくれるという精神性がある。私は色々と考えてしまうので、そういう風に余裕を持って大きく構えられたら、もう少し笑顔が増えるのかもしれないと思った。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

**西山氏**：元々貧しいと、立ち直るのが早いということはあるようだが、貧困があるところに災害があったというのが、今回の根本の問題であると思う。東北では、お年寄りが多くて過疎に向かっているところに被害が来て、なかなか明るい方向に向くことは難しい。他方、フィリピンは子どもが多いので、抱えているものは多いのだろうが、明るい顔で接してくる。従って、フィリピンの問題の根本は貧困で、希望となるのは、若い世代がいっぱいいることだと思う。

**Q7**：次に台風が来た時に同じことを繰り返さないようにするための動きというのはあるのか。

**赤坂氏**：今回の仮設のスペックは、彼らの感覚からすると仮設ではないようだ。柱が非常に太く、強度を重要視している。ご縁があって他の所で本設を建てることになって、一昨日除幕式だったのだが、本設の方は、教育省が作った強度を非常に強くしたスペックがあり、コストが1.7倍となっている。逆にそれが復興の障害になっているという面もある。従って、本設ができるまでの繋ぎとしての仮設というのは非常に必要とされている。

以上